



Photo by Tsuneo Nakamura

海と日本PROJECT

飛鳥Ⅱ船上ヴァイオリン演奏会

アンドリュー・ヒューム
1913年製ヴァイオリン
「ヒューム」



Photo by David Rattray

ストラディヴァリウス
1736年製ヴァイオリン
「ムッツ」



Photo by S. Yokoyama

2018年7月23日(月)
客船「飛鳥Ⅱ」 ギャラクシーラウンジ

主催：日本財団、日本音楽財団
協賛：郵船クルーズ株式会社

ごあいさつ

南沢基金

～名も知らぬ遠い島から流れ着いた椰子の実は、「椰子の実」という美しい歌になりました～

今日、その歌が、「タイタニック号」にゆかりのあるヴァイオリンで奏でられます。このヴァイオリンは、ゲスト・スピーカーであるクリストファー・ワードさんの曾祖父にあたるアンドリュー・ヒュームさんが製作したものです。アンドリュー・ヒュームさんは、「タイタニック号」船上で沈没直前まで演奏を続けた楽団員の一人で、ワードさんの祖父のジョック・ヒュームさんにこの楽器を乗船前に手渡そうとしていたといわれます。ことによると、「タイタニック号」の上で演奏されていたかも知れない楽器なのです。

今日登場するもう一つのヴァイオリン、ストラディヴァリウス1736年製ヴァイオリン「ムンツ」は、製作後280年以上の歴史を持つ名器です。これら2つの楽器はみなさまの耳にどのような響きを伝えるでしょうか。

～浪が響く海辺で、貴方が「椰子の実」を手にとった時、何を思うでしょう～

学者の中には日本人の祖先の辿って来た道を「海上の道」の説に導いた人もいます。時代は変わり、今考えなくてはならないのは海の環境に関わること、中でもマイクロプラスチック（微細プラスチック片）の問題です。海辺に流れ着く大量のプラスチックのゴミは、マイクロプラスチックとなって地球規模の公害を産み、食物連鎖を経て人体の中にも入りこむことが昨今心配されています。「海をキレイに」することは人体の中をもキレイにする時代になったことを忘れてはならないでしょう。

「海をキレイに」は、日本財団の「海と日本PROJECT」が掲げる目標の一つです。他にも、「海に学ぼう」という目標があります。「海に学んで、海をキレイにする」。そのキレイな海を豪華客船飛鳥Ⅱで巡って行くと、水平線の彼方にまた新しい世界が開けていくことしょう。若い皆さんがその広い海に目を注ぎ、その広い世界で活躍する日が待ち望まれます。

みなさんは、「タイタニック号」を知っていますか。「タイタニック号」は1912年に建造された当時世界最大の豪華客船です。多くの人たちがその大きさや豪華さに圧倒され、「不沈船」と呼びました。しかし、なんと「タイタニック号」は初めての航海で冰山に激突し、沈没してしまいます。乗員乗客合わせて1,500人以上の人が亡くなるというとても大きな事故でした。そんな悲劇の裏に、沈没する船上で混乱している人々を、勇気づけようと最期まで音を奏で続けた勇敢な音楽隊の物語がそこにはありました。

本演奏会は、その音楽隊たちの勇気が時代を超え、ある、音楽を愛する方に届いたことがきっかけで開催されることとなりました。人々の心を今も動かし続けている「タイタニック号」の音楽隊の勇気や音楽への思いが、みなさんにも届いて欲しいという寄付者の願いが本演奏会には込められています。

また、今回講演でお話しいただく「タイタニック号」音楽隊の一員のお孫さんであるワードさんは、海をめぐる環境問題について研究し、海を未来へ残すための活動に取り組んでおられます。私たち「日本財団」も、若い人たちの海離れや環境問題をはじめとする海の抱えるさまざまな問題に対し、未来の人たちに海を残したいという願いのもと「海と日本PROJECT」を行うなど、その解決に取り組んでいます。本演奏会もその一つとなります。会場である「飛鳥Ⅱ」は、日本最大の豪華客船で、その大きさはタイタニックと比べてもひけを取りません。船上見学会では船の豪華さを味わうだけでなく、船上のデッキから海を眺めたり潮風を感じたりと、海と触れ合い、海との出会いも楽しんでいただけたらと思っています。そして、本演奏会の後、みなさんの勇気や優しさが世界に多くの希望を広めることができると信じることの大切さに気づいてもらえたらうれしく思います。

末筆になりますが、本演奏会開催に際しご寄付いただきました南沢基金、本演奏会会場である飛鳥Ⅱをご提供くださった郵船クルーズ様、ヴァイオリニストの有希・マヌエラ・ヤンケ様とピアニストの林絵里様、出演にご協力をいただいた日本音楽財団にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本財団と当財団の共催事業として、この素晴らしい客船「飛鳥Ⅱ」で演奏会が開催できることを、とても喜ばしく思います。南沢基金からのご支援ならびに郵船クルーズ様のご協力無くして本事業の実現はございませんでした。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本音楽財団は、クラシック音楽を通じた国際貢献を行うため、1994年に楽器貸与事業を開始いたしました。今からおよそ30年以上も前にイタリアで製作された弦楽器名器として知られるストラディヴァリウスとグアルネリ・デル・ジェスを合計21挺保有し、世界を舞台に活躍する一流の演奏家や若手有望演奏家に、国籍を問わず無償で貸与しています。また、世界的文化遺産ともいわれるこれらの楽器を次世代へ継承するため、管理者として保全に努めています。

本日は、「タイタニック号」の音楽隊にまつわるヴァイオリンと、当財団が保有するストラディヴァリウス1736年製ヴァイオリン「ムンツ」の2挺のヴァイオリンの音色を有希・マヌエラ・ヤンケさんの演奏でお楽しみいただきます。ミュンヘンにてドイツ人の父と日本人の母の音楽一家に生まれ、3歳でヴァイオリンを始めた有希さんは、5歳でドイツ青少年音楽コンクールの8歳以下最年少グループ・ヴァイオリン部門で優勝、9歳の時ソリストとしてオーケストラと共演し、ドイツで鮮烈なデビューを飾りました。その後数々の世界的な音楽コンクールに優勝し、2012年から2年間でドレスデン国立歌劇場管弦楽団（シュターツカペレ・ドレスデン）の460年に及ぶ史上初の女性コンサートマスターを務め、2015年8月にはベルリン国立歌劇場管弦楽団（シュターツカペレ・ベルリン）のコンサートマスターに就任しています。

ピアニストの林絵里さんは、桐朋学園大学卒業後、同大学弦楽科の伴奏研究員を務め、1986年チャイコフスキー国際音楽コンクール最優秀伴奏者（チェロ部門）に選ばれた経歴をお持ちです。当財団の演奏会にも度々出演し、その演奏は大変な好評をいただいています。

お二人の共演をどうぞお楽しみください。

プログラム

“アンドリュー・ヒューム1913年製ヴァイオリン 「ヒューム」による演奏”

サラ・アダムス：主よ御許に近づかん
Sarah F. Adams : Nearer, My God, to Thee

おおなかとらじ やし
大中寅二：椰子の実
Toraji Onaka : The Little Coconut

“ストラディヴァリウス1736年製ヴァイオリン 「ムンツ」による演奏”

モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジークより
1楽章 アレグロ

Mozart : Eine kleine Nachtmusik
I. Allegro

バッハ：G線上のアリア
Bach : Air on G String

ドヴォルザーク：ユーモレスク
Dvořák : Humoresques

クライスラー：中国の太鼓
Kreisler : Tambourin Chinois

マスネ：タイスの瞑想曲
Massenet : Méditation

サラサーテ：サパテアート
Sarasate : Zapateado

ブラームス：ハンガリー舞曲第5番
Brahms : Hungarian Dance No.5

“合唱”

いとうえたけし
井上武士：海
Takeshi Inoue : The Sea

ジョック・ヒュームについて

クリストファー・ワード



ジョック・ヒューム氏（当時21歳）の写真

タイタニック号が海に沈んだ時、およそ1,500人の男性・女性・子どもたちが冷たい海に投げ出され、20分も経たないうちに低体温症で亡くなりました。1,000人以上の行方は未だに判っていません。彼らの身にいったい何が occurred のでしょう。私は真実を突き止めたくまりました。なぜなら彼らの中に、「タイタニック・オーケストラ」のヴァイオリニストだった当時21歳の私の祖父ジョック・ヒュームがいたからです。ジョック

と7人の演奏家たちは最後の救命ボートが出発した後もデッキに残り、船に残され死を目前にした人々の心を鎮めるため賛美歌の演奏を続けました。

沈没から10日後、ジョックの遺体は事故現場から40マイル（約64キロメートル）離れた海中で見つかり、そこから一番近いカナダ・ノバスコシア州のハリファックスに運ばれました。タイタニック号の製造元であるホワイト・スター・ライン社から遺族宛に、ジョックの遺体を母国スコットランドに運ぶための高額な「通常貨物運搬代」が請求された後、ハリファックスに埋葬されました。

ジョックの娘（私の母）は、ジョックが亡くなった6ヵ月後に生まれました。しかし彼女の母親は彼女が8歳のときに亡くなったため、ジョックが「タイタニック・オーケストラ」の一員となった経緯を知らずに育ちました。調査を進める中で、私はジョックが幼い頃から素晴らしいヴァイオリニストであったこと、そして、15歳の時には既に定期客船上演奏家としてのキャリアをスタートさせ、若い演奏家なら誰もがうらやむ世界一の不沈船、タイタニック号のオーケストラの楽団員の座を射止めたことを知りました。

タイタニック・オーケストラについて

クリストファー・ワード



タイタニック・オーケストラ団員の写真
右下がジョック・ヒューム氏

8人の「タイタニック・オーケストラ」メンバーは、乗組員としてではなく、乗客として、片道分のチケットを手に乗船しました。ホワイト・スター・ライン社は、リヴァプールの下請け業者に船上で行われる一切の演奏会業務を委託しました。演奏家達にはデッキの下のキャビン1室が与えられ、寝食を共にしました。

タイタニック号に乗船する前から、演奏家たちは既に

他の場所で共演していたため、お互いのことは知っていました。例えば、ジョックとチェリストのジョン・ウッドワードはその1年前、タイタニック号の姉妹船、オリンピック号の初航海で共演しています。

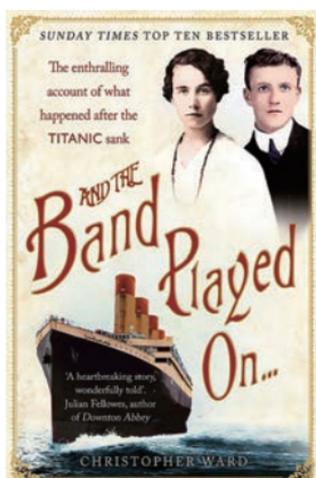
乗船した8名の演奏家全員がはじめて一同に集まったのは、沈みかけたデッキでした。それまでは、トリオ（3人組）やカルテット（4人組）、クインテット（5人組）の小規模編制で、礼拝時やファースト・セカンドクラスの乗客向けの演奏をダイニングルームやラウンジ等で演奏していました。ニューヨーク到着までの演奏活動の対価として彼らに支払われたのはわずか4ポンドと少ないものでしたが、乗客からのリクエスト曲を演奏する際に受け取るチップで儲けを得ていました。

クリストファー・ワード (ジャーナリスト・著述家)

1912年に建造された当時世界最大の豪華客船「タイタニック号」に音楽隊のひとりとして乗船し、沈没直前までデッキで演奏を続けたことで知られるヴァイオリニストのジョック・ヒューム(享年21歳)の孫。41歳までジャーナリストおよび編集長としてイギリスの新聞社デイリー・エクスプレスに務めた後、雑誌社レッドウッド・ロンドンを共同設立し、長年同社の経営に携わった。ジャーナリストとしての功績およびその後会長を務めた国際的な非営利団体、WWF-UK(世界自然保護基金英国支部)での活動が称えられ、1995年には英国雑誌界で栄誉のあるBSME Mark Boxer Awardを受賞した。祖父ジョックのようにスコティッシュ・ボーダーズで暮しており、ヴァイオリンが弾けないことを日々悔やんでいる。



著書の紹介



“And the Band Played On”
(そして楽団員は演奏を続けた)

2012年3月に出版された、クリストファー・ワードの著書。

タイタニック号が沈む中演奏を続けた音楽隊のひとりで、当時21歳だったヴァイオリニスト、ジョック・ヒュームの死去により、悲劇的な運命を強いられた2つの全く異なる家族の物語。階級の違いが

生き方だけでなく人の生死をも左右した様子が描かれる。事故から100年がたった今日、筆者が自らの祖父、ジョックの人生をひも解き明らかにした衝撃的な真実のストーリー。

ゆき 有希・マヌエラ・ヤンケ (ヴァイオリン)

1986年ミュンヘンにてドイツ人の父と日本人の母の音楽一家に生まれ、3歳でヴァイオリンを始めた。1991年、5歳でドイツ青少年音楽コンクールの8歳以下最年少グループ・ヴァイオリン部門で優勝、9歳の時ソリストとしてオーケストラと共演し、ドイツで鮮烈なデビューを飾った。



© Shigeto Imura

2001年、ドイツ青少年音楽コンクールの全ドイツ大会で1位を受賞した他、シュポア国際コンクール（ドイツ）やブラームス国際コンクール（オーストリア）でも優勝。2004年パガニーニ国際コンクールでは最高位と三つの副賞全てを受賞、2007年チャイコフスキー国際コンクールで3位、同年のサラサーテ国際ヴァイオリン・コンクール（スペイン）では優勝を果たした。

これまでに、ヨーロッパの数多くのオーケストラと共演、日本に於いてはNHK交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団等から招かれソリストとして活躍している。2012年から2年間、ドレスデン国立歌劇場管弦楽団（シュターツカペレ・ドレスデン）の460年に及ぶ史上初の女性コンサートマスターを務め、2015年8月にはベルリン国立歌劇場管弦楽団（シュターツカペレ・ベルリン）のコンサートマスターに就任した。2007年より日本音楽財団保有ストラディヴァリウス1736年製ヴァイオリン「ムッツ」を使用している。

林 絵里 (ピアノ)

東京に生まれ、4才よりピアノを始める。1977年第31回全日本学生音楽コンクール、奨励賞受賞。桐朋女子高校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部卒業。ピアノを樋口恵子、弘中孝、故中島和彦の各氏に師事。卒業後、同大学に於いて、2年間、弦楽科伴奏研究員を務める。



1986年第8回チャイコフスキー国際音楽コンクールのチェロ部門で最優秀伴奏者賞を受賞。1986年より日本国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門の公式ピアニストを務めた。1991年、ミュンヘンにて、ワルター・ノータス氏に師事。

これまで、スティーヴン・イッサーリス、エドアルド・メルクス、バルトゥミオ・ニジジョー、エリック・シューマン、諏訪内晶子をはじめ、数多くの著名な演奏家と共演。また、NHK交響楽団メンバーとの室内楽演奏や、NHK-FM、CDの録音なども行っている。現在、国内外で共演ピアニストとして活躍中。

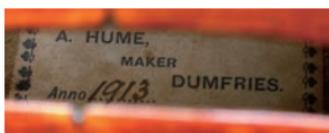


Photo by David Rattray

アンドリュー・ヒューム1913年製 ヴァイオリン「ヒューム」

1913 Hume Violin

タイタニック号沈没事故で息子を亡くしたアンドリュー・ヒュームは、それまでの音楽教育活動を諦め楽器製作に専念し、1924年の大英帝国万博（英国植民地間の貿易促進を目的とした万博）の楽器コンテストにて金賞を受賞しました。今からちょうど5年前、王立音楽アカデミー（ロンドンの音楽学校）の楽器管理者であるデヴィッド・ラトレイ氏がこの楽器を発見。クリストファー・ワード（本日のスピーカー）はラトレイ氏から同楽器を購入しました。保存状態は良好で、エディンバラ・フェスティバル含む数々の国際的なイベントで演奏されています。



楽器の中に貼られたラベル



Photo by S. Yokoyama

ストラディヴァリウス1736年製 ヴァイオリン「ムントツ」

Stradivarius 1736 Violin "Muntz"

「ストラディヴァリウス」は、今からおよそ300年前のイタリア・クレモナにて、アントニオ・ストラディヴァリ（1644～1737）が製作した楽器で、弦楽器の最高峰とされています。1736年に作製されたこのヴァイオリンの内側に貼られたラベルにはストラディヴァリ本人の手書きで「d'anni 92(92歳)」と書かれています。透明な黄褐色のニス^{とうめい おうかつしよく}が楽器のほぼ全体に綺麗に残っており、楽器の保存状態も音色も格段に優れています。1874年以降、英国の収集家ムントツが所有していたため、「ムントツ」と呼ばれており、1737年に死去したストラディヴァリが、最晩年に製作した楽器の一つとして知られています。

“Nearer, my God, to Thee”

主よ御許に近づかん 賛美歌320番

Nearer, my God, to Thee, 主よ御許に近づかん
Nearer to Thee! 登る道は十字架に
E'en though it be a cross ありともなど悲しむべき
That raiseth me; 主よ御許に近づかん
Still all my song shall be, 現し世をば離れて
Nearer, my God, to Thee, 天翔ける日来たらば
Nearer, my God, to Thee, いよいよまず御許に行き
Nearer to Thee! 主の笑顔を仰ぎ見ん
(現代カトリックの歌詞)

“椰子の実”

作詞：島崎藤村、作曲：大中寅二

名も知らぬ 遠き島より 流れ寄る 椰子の実一つ
故郷の 岸を離れて 汝はそも波に
幾月
旧の木は 生いや茂れる 枝はなお影をやなせる
われもまた 渚を枕 孤身の
浮寝の旅ぞ
実をとりにて 胸にあつれば 新なり
流離の憂
海の日 沈むを見れば 激り落つ 異郷の涙
思いやる 八重の汐々
いずれの日にか 国に帰らん

海

(うみは広いな大きいな)

作詞：林柳波、作曲：井上武士

海は広いな 大きいな
月がのぼるし 日が沈む
海は大波 青い波
ゆれてどこまで続くやら
海にお舟を浮かばして
行ってみたいな よその国

～ことばがなくても心が伝わる音楽。
世代を超えて、大戦の戦乱を乗り越えて～

南沢基金は音楽を愛する一家の歴史から
生み出されました。

クリストファー・ワードさんのストーリーから
は、「タイタニック号」船上で沈没直前まで演奏
を続けた音楽隊が、緊急事態の中で自らの命を
も顧みず、最後まで演奏を続けていた状況がわ
かります。音楽隊が奏でたとされる音楽とその
勇気に心を打たれ、この物語を多くの人々に伝
えたいという気持ちが生まれました。この度、
ワードさんをはじめ皆さんのご支援でその気持
ちがこのような催しによって表せたことに心か
ら御礼申し上げます。

南沢基金



郵船クルーズ株式会社



日本
財団
海と日本
PROJECT

日本音楽財団
NIPPON MUSIC FOUNDATION